

表題

恋愛抒情詩の伝統における愛の神聖性とキリスト教教義
—— ダンテとペトラルカに見る恋愛への共感と拒絶 ——

著者名

永嶋哲也

所属

福岡歯科大学医療人間学講座医療倫理学分野
〒814-0193 福岡市早良区田村 2 丁目 15 番 1 号

ランニングタイトル

愛の神聖性とキリスト教教義

Title Christian doctrine and the Divinity of Love in the tradition of Western lyric poetry
— Sympathy and Rejection of “Amor” (The God of Love) in Dante and Petrarca —

Author NAGASHIMA Tetsuya,

Office Section of Medical Ethics, Department of Medical Humanities, Fukuoka
Dental College,
2-15-1 Tamura, Sawara-ku, Fukuoka, 814-0193, JAPAN

Key words: Francesco Petrarca, Dante Alighieri, The Invention of Love, Dolce Stil Novo,
The God of Love

Abstract:

The proposition of "Love is an invention of the 12th century" is right as far as it means that our “exemplar of love” (i.e. “love is holy and sublime”) have been formed in the Middle Ages of Western Europe. The source of the exemplar of love is medieval troubadours. In this paper, I describe what kind of attitude Dante and Petrarch, the poets who are in the tradition from the troubadours, did take to love. Christianity is a monotheistic religion, which forbids the worship of other gods. That deification of love is contrary to the doctrine of Christian. In his *Secretum (My Secret)* Petrarch has rejected the divinity of love. In real life it was not the case, however. In his *Divine Comedy* which is based on Christian morality Dante has a description that can be read in sympathy for the carnal love. One of the reasons that love occupies a special position in Western culture is this exclusive and inclusive relationship between romantic love and Christian doctrine, which we can see in Dante and Petrarch.

はじめに

本稿での議論が前提としていることについて、はじめに述べておきたい。西洋中世の文化史が語られる際に「恋愛の発明」あるいは「恋愛の誕生」という表現が使われることが多々ある。つまり、われわれに馴染みの「恋愛」というものは、12世紀の西ヨーロッパで発明されたものであるという考え方である。恋愛がある特定の文化圏において発明されたものであるという主張は挑発的でもあり、しばしばこの表現だけが一人歩きし、誤解された上で批判も為されるが、実際、この表現が意味するところは（少なくとも部分的には）正しいと思われる¹。つまり「恋愛の発明」を文字通り「恋愛感情」という感情が発明されたという意味ではなく、「恋愛は神聖で崇高なものである」という恋愛に対する受け取り方が発明されたという意味で受け取れば、それが12世紀の西ヨーロッパで起こったというのは正しいと言えるだろうからである。

恋愛とはどういうものかということに関する了解は、そもそも厳密に言えば、個々人によって異なっているだろう。しかし、同じ文化的背景を有している人びとの間でゆるやかな意味で「共通」と言えるような了解もあると言っていいだろう。つまり、小説や映画などのフィクションの中で描かれる恋愛像はわれわれの恋愛に対する受け取り方を反映しているとも言えるし、逆にわれわれに恋愛とはかくなるものであるという型を与えるものでもある。そういった共通了解を「恋愛の範型」と呼ぶ²とすれば、「恋愛12世紀発明説」の意味は、「恋愛は神聖で崇高なものである」という恋愛の範型が12世紀に成立したのだという主張だと理解できる。

では、その神聖さ、崇高さというのはどこに由来するののかと言えばもちろん宗教的な感覚である。つまり、恋愛12世紀発明説の大本となっているのはC.S.ルイスの『愛とアレゴリー』³であるが、その書物の第1章でルイスは南フランスのトルバドゥールがうたった恋愛詩について論じて恋愛の発明を述べ、そしてその恋愛詩に4つの特徴「謙譲」「礼節」「姦通」「愛の宗教」を帰している。それら4点のうち最後を除く3点はその後の歴史研究や文学史研究にて批判にさらされており、今日もはや支持するのは難しいが⁴、第4点の「愛の宗教」という特徴は今日でも説得力を持つと思われる⁵。本稿において扱われるのは、この「愛の宗教」つまり「愛は神である」という考え方のもとに愛神への帰依を述べる文学的伝統と、「神は愛である」と説くキリスト教の神学的伝統がどのように共在していたか確認する

ことである。

「愛は神である」と「神は愛である」

まずルイス自身の表現を確認しておこう。上述の『愛とアレゴリー』においてルイスは「愛の宗教」について次のように述べている：

その愛は絶望的かつ悲劇的な感情として表現されている。時としてほとんど絶望的ですからある。彼が全くの絶望に陥らなくてすむのは、忠実な崇拝者を決して裏切ることなく、どんな残酷な麗人たちをも服従させようとする愛の神への信仰があるからなのである。⁶

実際、トルバドゥールの恋愛詩や中世の騎士物語には愛の神 the God of Love つまりラテン語で言うなら Amor がしばしば登場する。しかし同時に彼ら（彼女ら）はキリスト教徒であり、キリストへの祈りも同時に述べられる。極端な例では12世紀後半に書かれた『愛について *De Amore*』⁷の著者であるアンドレアス・カペラヌスは司祭だと目されている⁸が、その著書の中では愛の神自らが宣言した31箇条の「愛の掟 *Regulae Amoris*」など、愛の神について多々述べられている。つまり、中世の恋愛詩や騎士物語などを書いていた人物も読んでいた人物もキリスト教徒であり、さらにその中にはキリスト教の聖職者でありながら「愛の神」が登場する文学作品を残したものさえいるということである。

しかし改めて言うまでもなくキリスト教はいわゆる一神教で、主たる神以外を神として崇拝することを禁じている。歴史的な事実として、キリスト教が普及する中でキリスト教以前に存在した他の神々は悪魔や魔女として排斥されていくか、逆に聖人譚の一部としてキリスト教の中に取り込まれていくか、どちらかの道をたどった。キリスト教の文化圏の中にキリスト教の神以外の神が歴然として登場してくる文化伝統があったというのは明らかに特異な事態である。

さらに事情を複雑にする要素がある。キリスト教自体が「愛の宗教」と自己規定していることである。即ちキリスト教は教義において「神は愛である」と主張される⁹が、しかしそれは断じて「愛は神である」と同義ではない。信徒においても神に対する愛が対神徳として推奨されるが、人間的な愛である恋愛とはまったく異な

るものである。実際、キリスト教義の「愛」はラテン語なら *caritas* ギリシア語なら *ἀγάπη* であるのに対して、「恋愛」の方はギリシア語なら *ἔρος* ラテン語なら *amor* もしくは *cupido* で、厳密には別々の単語があてられる。キリスト教神学の歴史の中では、プロテスタント神学者であるニーグレンが、カトリックの伝統の中で *ἀγάπη* と *ἔρος* が正しく区別されてこなかったと批判した『アガペーとエロース』¹⁰ が有名であるが、事実、このニーグレンの指摘は二つの愛が本来別々のものであってもキリスト教において長いあいだ微妙な関係であり続けたことを逆に示している。また、「恋愛は神聖で崇高なものである」という恋愛の範型が成立するために、愛の宗教たるキリスト教の影響が不可欠であったことは想像に難くない¹¹ が、逆にキリスト教の正統な立場からは神を僭称する愛は非常に危険な存在だったことも容易に想像がつく。

実際、C.S.ルイスは後年の著作である『四つの愛』¹² において、『愛とアレゴリー』における愛神の論じ方が軽率であったと反省を述べている¹³。つまり神化する愛は単に文学的な表現と片付けるには危険すぎるものだと考えを変えたのである。聖愛、神への愛を頂点とする愛の秩序の中に組み入れられてやすやすと飼い馴らされるほど愛の神は従順ではないと覚ったとも表現できようか。神学の場面では愛神に対する警戒感が中世においてすでに表明されている。先に言及したアンドレアス・カペラヌスの『愛について』をエチエンヌ・タンピエが「1277年の禁令」において名指しで非難している¹⁴。この禁令は当時のパリ司教タンピエによって宣言されたもので、パリ大学などで活躍していたラテン・アヴェロエス主義者を糾弾したことで有名であるが、アンドレアスの書物が書かれてからおよそ100年の時が経過している。当時ですらまだ『愛について』が、タンピエが糾弾しなければならぬほどの影響力を有していたのであろうことがわかる。

本稿においては、それら二つ「神は愛である」と「愛は神である」が文学的な伝統の中で危うい仕方で共存していた様子を確認したい。つまりキリスト教神学への深い理解を有すると同時にトルバドゥールに発する恋愛詩の伝統を強く受け継いでいる二人の天才ダンテとペトラルカを取り上げ、愛なる神と神なる愛の共存と拮抗を確認したい。

ペトラルカ『わが秘密』での恋愛の否定

両者を順に取り上げるに際して、われわれにとってより理解しやすい、つまり現代のわれわれにいささかでも近いペトラルカ(Francesco Petrarca, 1304-74)から取り上げたい。その近さが意味するのは、単にダンテよりも40～50年ほど後の時代に生きたというだけではなく、後述するとおり、愛なる神と神なる愛とが共存することの矛盾に自覚的で、道理が通る仕方で自己批判を行っているので、われわれにとってまだ理解しやすいからである。そしてその矛盾と自己批判を、彼のある意味異色な著作『わが秘密』¹⁵において見てゆきたい。

ペトラルカは「人文主義者の父」とも呼ばれる通り、ローマ古典研究やラテン語文法整備で業績を残しているが、『凱旋』『アフリカ』や『カンツォニエーレ』¹⁶といった俗語詩を残し「桂冠詩人」の称号を得ている。特に『カンツォニエーレ』に含まれる一連の恋愛抒情詩群は有名で、「ラウラ」(Laura)あるいは「ラウレッタ」と呼ばれる若い人妻へ捧げられた純愛が歌われている。「ラウラ」なる女性が実在したのか実在しなかったのか、あるいは実在したとしてもその名の通り「ラウラ」なる名前だったのかについては諸説あり¹⁷、どの説が正しいのかは専門家の判断に委ねるしかないが、ペトラルカ自身も認めている通りラウラは彼にとって桂冠詩人(Lat. Poeta laureatus)の名誉と結びついている。つまり「ラウラ」のラテン語表記“Laurea”と桂冠詩人の頭を飾る「桂冠」あるいは「月桂樹」を意味するラテン語“laurea”とは同じ綴りである¹⁸。要するに彼女はペトラルカにとって愛の対象、「永遠の恋人」であると同時に、詩人としての栄誉の象徴でもあった¹⁹。

先に『わが秘密』を「ある意味異色な」と表現した理由の一つはここにある。彼はこの作品においてこの二つの「ラウラ」つまり愛と栄誉を否定している。本書は3巻構成となっているが、第1巻で不幸つまり魂の病である罪とそれらからの救済について一般的な考察を行い、次いで第2巻でいわゆる「七つの大罪」つまりキリスト教倫理における七つの罪源について論じている。それらの考察をふまえて最終巻である第3巻においては、以下のように愛と名誉欲の批判を展開している。

フランチェスコ ああ！ わたしは思っていた以上にみじめだったのです！ わたしはいまだに二つの鎖で魂をしばられているのに、その鎖を知らないということでしょうか。

アウグスティヌス いや、ひじょうによく知っている。ただ、その美

しさに魅惑され、鎖でなく財宝だと思いこんでいるのだ。(中略)死へとひきずっていく縛めの縄をよろこび、しかも、みじめさのきわみというべきことに自慢している。

フランチェスコ 鎖とおっしゃるのは、なんのことでしょうか。

アウグスティヌス 愛と名誉。

フランチェスコ なんですか！ 異なることを聞くものです！ あなたはこの二つを鎖とよび、わたしさえ甘受するならこれを奪りあげてしまうのですか。²⁰

ペトラルカはアウグスティヌスの『告白』を座右の書としていたと言われるが、対話篇形式で書かれた本著作のなかで対話相手を務めるのは彼が尊敬して止まないアウグスティヌスである。そしてアウグスティヌスは論駁者としての役割を果たし、ペトラルカの誤った信念を暴き、彼が固執する立場を論難してゆく。この『わが秘密』はペトラルカが精神的な危機に直面していた²¹自己を救済するために書いたと言われているが、論駁されるという仕方で精神的な危機から救われるという点では、そして特に病からの治癒という比喻が使われるという点では、アウグスティヌスよりもボエティウス『哲学の慰め』からの影響が見て取れよう。さらに人生の暗闇に迷い込んでしまった時に書かれ、そしてそこで登場するのが作者の尊敬する先人であるという点でわれわれは『わが秘密』にダンテ『神曲』との共通点を見いだすだろう。しかし、恋愛に対する態度はダンテとは異なっている。本著作中でペトラルカはまず、次のように自分の立場を弁明する。

フランチェスコ いかかわしい卑猥な女に情熱を燃やすなら、それはきわめて不健全な情念です。しかしもし、世にもまれな美德の鑑ともいべき人にひかれ、その人をひたむきに敬愛するとすれば、どう思われますか。これほどの違いのあることがらに、なんの区別もなさいませんか。わたしたちはそれほど恥知らずになったのでしょうか。しかしわたしの考えをすこし述べますと、第一の愛は魂にとって有害な抑圧的重荷であり、第二の愛はこれほど幸福なものはほとんどないと思われます。²²

このようなペトラルカの立場を「アウグスティヌス」は論駁してゆく。もちろんペトラルカも反論し抵抗するのだが、そのすべてに対して理路整然と斥けてしまう。そしてさらに次のように畳み掛ける。

アウグスティヌス もっとはっきりわかるように、よく注意して聞きたまえ。現世の事物にたいする愛ほど神のことを忘れさせ、なおざりにさせるものはない。なかでも、固有名詞で〈愛〉とよばれ、しかも（これにまさる冒瀆はないが）神とさえよばれているものが、とくにそうだ。これはつまり、人間の狂気に宗教的口実をあたえ、ひどい罪悪を神意のせいにして正当化するためにほかならない。²³

最後はペトラルカも「アウグスティヌス」が正しいことを認めざるをえなくなる。

アウグスティヌス しかし本題にもどるとして、なかでもとりわけひどいみじめさは、神忘却と自己忘却がともに生じることだ。じっさい、おびただしい禍いの重荷におしまげられていたのでは、魂はどうして真の善の、唯一にして純なる根源へとたどりつけるだろうか。（中略）

フランチェスコ ほんとうに、負けました。いまおっしゃったことはすべて、経験という書物のなかから選び出してくださったように思われるからです。²⁴

『わが秘密 *Secretum*』あるいは『わが心に秘めたる葛藤について *De secreto conflictu curarum mearum*』と題された本書を、生前のペトラルカは公開しなかったし、友人たちにさえ見せなかったと言われる²⁵。自分自身のために自分自身を救済するために書かれた本書でペトラルカは自己批判を行っている。言うまでもなく「アウグスティヌス」は実在のアウグスティヌスではなくて他ならぬペトラルカであり、ペトラルカ自身がアウグスティヌスの名前を借りて自己批判をしているわけであるが、そこで批判されているのは詩人として成功をもたらした恋愛と詩人としての成功そのものである。それゆえ、その秘めたる著作のなかで詩人ペトラルカはキリスト教徒ペトラルカ（＝「アウグスティヌス」）に言い負かされているが、実

生活においては必ずしもその通りになっていない。神学的な立場からの議論は理路整然としており、われわれが読んでも理解しやすい。むしろ詩人ペトラルカの立場が同時にキリスト教神学の立場と両立している事態はむしろ理解しがたい。だがしかし、実生活においてペトラルカは両立させていたと思わざるを得ないし、また彼においてのように両者の対立が先鋭化する前の時代は、ある意味不可思議な仕方で両立していたと言わざるを得ない。

次にその微妙な緊張のもとでの不可思議な両立を見てみたい。

ダンテ『神曲』での恋愛への共感

ダンテ・アリギエーリ (Dante Alighieri, 1265-1321) の書いた『神曲 *La Divina Commedia*』²⁶ は、中世文学がほとんど顧みられない日本にあつて珍しく古くから紹介され、また現在でも有名な中世文学作品である。それゆえ、本稿において『神曲』について取り上げる前に、その作品と著者について改めて紹介する必要はあまりないのかもしれないが、基本的な事柄をできるだけ簡潔に確認しておきたい。

『神曲』は壮大な長編叙事詩で、地獄篇、煉獄篇、天国篇の三篇からなる。設定としては1300年に35歳のダンテが暗い森の中に迷い込み、そこから地獄へと入り込み、煉獄を通過して天国まで巡ってくるというものである。そして、地獄と煉獄とを導くのはダンテが尊敬して止まないローマ黄金期の詩人ウェルギリウスであり、天国を導くのはダンテが憧れている女性ベアトリーチェと神への愛を強調した聖人クレルヴォーのベルナルドである。

ベアトリーチェはダンテにとっての「天使のような貴婦人」²⁷ つまり恋愛の象徴であるが、聖ベルナルドもアウグスティヌスの「愛の秩序」を継承した神学論を展開しており言わば聖愛の象徴²⁸ として位置づけることができるだろう。そう考えるならばウェルギリウスも「愛はすべてを打ち負かす。われらもまた、愛の神に屈服しよう。」という有名な一節²⁹ を残しており、言わば古代的愛の象徴と見なすこともできる。つまり、このような三者に導かれて進む『神曲』の道行きは、ダンテにとって「愛」によって導かれる自己救済の行程なのである。

このように『神曲』を理解すれば、人間的な恋愛がダンテにおいては神への愛と矛盾を生み出していないことを見て取ることができる。とは言うものの、ベアトリーチェは没した時点では人妻であったとはいえ、ダンテが最初に出会った時は少年

少女であった。おそらく二人に身体を伴うような恋愛関係は一度も存在しなかったであろうし、純粋に精神的な愛だったと表現してもいいだろう。しかしこの清新体派の詩人が肉体関係を伴うような不倫関係すべてに嫌悪感を抱いていたかというとおそらくそうではない。むしろ、そこに美しい恋愛感情が介在する限り強い共感を抱いただろうとさえ推察される。そのことを地獄の第2圏で描かれているパオロとフランチェスカのエピソードで確認したい。

『神曲』の地獄篇は、34歌から構成される。その道行きとしてダンテは、地獄であって本来の地獄ではない地獄第1圏の辺獄（リンボ）（第4歌）から、もっとも重大な罪を犯した反逆者の罰せられている第9圏（第31-34歌）まで、順に地中深くへと下って行く。第1圏の辺獄に置かれているのは、イエスが地上に降りてくる前に生きたため洗礼を受けられず、またキリスト教の教えを知らないにもかかわらず正しく生きた古代人たちである。ソクラテス、プラトン、アリストテレスのような哲学者もホメロス、ルクレティウスのような詩人、幾何学者エウクレイデスや医聖ヒポクラテスはもちろん、ダンテの尊敬するウェルギリウスやキケロー³⁰もそこにいることになっている。それゆえもちろん天国でも煉獄でもないのであるが、純粋に地獄とも言いがたい場所である。

そしてそのような辺獄の次に位置する地獄の第2圏が第5歌で歌われている、肉欲の罪を犯した者たちが罰せられているところである。そこでの様子をダンテは次のように描写している…

そこを過ぎると痛ましい声が私の耳にも
聞こえてきた、大勢の呻き声が耳を打つ場所に
私はいまやって来たのだ。
ここではいつさいの光は黙し、
その叫びは、嵐の日に逆風に叩かれて
海が発する轟きに似ていた。
地獄の颯風は、小止みなく
亡霊の群れを無理強いに駆り立て、
こづき、ゆさぶり、痛めつける。
亡霊の群れは廃墟の前にさしかかると、

叫び、泣き、喚き、
神の力を呪い罵る。
こうした責苦に遭うのは
欲望に負け理性を捨て、
肉欲の罪を犯した者の落ち行く運命と知れた。³¹

基本的にダンテによる地獄篇で責苦は「罪は罪自らによって裁かれる」³²である。つまり彼ら彼女らが犯してしまった罪そのものを象徴するような責苦が地獄には用意されていて、罪自体が罰となるようになっている。つまり愛欲という激情に流されてしまった人びとは、地獄にふく強風によって右へ左へと飛ばされ、翻弄されるという罰にあっている。

そのような人々のなかにはローマを脅かしたクレオパトラやトロイア戦争の引き金となったヘレナとパリス、中世ロマンスからはトリスタンなどの姿がある。しかし、その列にあって「一緒に進み／風に乗っていても軽やかに見え」³³と、ダンテが好意的に表現する二人の姿がある。パオロとフランチェスカである。二人を呼んで話を聞きたいというダンテに対してウェルギリウスは「二人を導く愛の名によって／頼むのだ。二人は必ず来るだろう」³⁴と答える。実際そうするとその二人の亡霊はその詩人たちのもとにやってきて、どうしてこういう境遇になったのかというダンテの質問に応じて次のように言う。

愛は優しい心にはたちまち燃えあがるものですが、
彼も私の美しい肢体ゆえに愛のとりことになりました、
その身を亡物にされた仕打ち、私いまも口惜しゅうございます。
愛された以上愛し返すのが愛の定め、
彼が好きでもう我慢のできぬほど愛は私をとらえ、
ご覧のように、いまもなお愛は私を捨てません。
愛は私ども二人を一つの死に導きました。
私どもの命を奪った者は必ずやカインの国へ墮ちるでしょう」³⁵

フランチェスカはパオロにとっては兄ジャンチオットの妻であり、パオロ自身にも

妻がいた。しかしこの二人は恋に落ちてしまう。おそらく恋仲になるまで積極的であったのはパオロの方であったと推察されるが、そのことをダンテは「愛された以上愛し返すのが愛の定め」(Amor, ch'a nullo amato amar perdona)と表現している。敢えて強く訳せば「愛神は、愛されたものが愛さないことを許さない」となるだろう。そして、二人はジャンチオットに逢い引きの現場を押しえられ惨殺されてしまう³⁶。このような二人の話を聞いてダンテは同情を隠さない...

これが二人が語った言葉だったが、
この傷心の魂のことを聞いた時、
私は面を伏せ、しばしうつむいたままだった。
すると詩人が私に尋ねた、「何を考えているのか？」
私は答えようとしていった、「ああ可哀想な、
いかにも優しい相思の情だ、それなのにかれらは
それがもとでこの悲惨な道へ堕ちてしまった！」³⁷

このような同情にウェルギリウスがどのような立場を取るのかは後述するが、先取りして言えば、ここでの「何を考えているのか？」はおそらく非難の意味がこもっていると受け取るのが妥当だろう。しかし、ダンテはそれには気づいた気配もなく、さらに質問を続ける。彼が尋ねたのは、相手への秘めた思いを互いに確認してしまったいきさつである。フランチェスカは「不幸の日にあつて／幸福の時を思い出すほど辛い苦しみはございません」³⁸ という非常に印象的な台詞に続けてその間に答えていく。

二人の間を取り持ったのはロマンス、つまり王妃グイニヴィアとランスロットの物語³⁹であった。二人は別にやましい気持ちもなくこの恋物語を読んでいたのだが、しかし読書の途中で目が合うとその度に顔色がかわってしまった。そしてついにランスロットがグイニヴィアに口づける場面を読むにいたって、パオロは隣に座るフランチェスカに口づけてしまう。そしてフランチェスカの告白は「その日私もはもう先を読みませんでした」という意味深長な文で終わる。⁴⁰

愛の成立の瞬間だけを描き、二人の関係を劇的に表現するというこの文学的な技巧は特筆すべきものがある。つまりこの箇所が多くの人に強い印象を与えるのは、

述べられている内容そのものよりもむしろダンテの意匠を凝らした表現ゆえであろう。それは、肉体関係を伴う婚外の恋愛にダンテが同情的⁴¹なのではないかと疑うに十分なだけの美しさである。またそのことはフランチェスカの告白を聞いた作中のダンテの反応にも同様のことが見て取れよう。

一人の魂がこう語る間に

もう一人の魂はさめざめと泣いた。哀憐の情に打たれ

私は死ぬかと思う間に、気を失い、

死体の倒れるごとく、どうと倒れた。⁴²

作中のダンテは、二人に同情するがあまりに失神してしまう。

『神曲』において地獄での罰は神の摂理であり、地獄では罪を犯した者が間違いなくその罪に相応しい罰を受けている。全知全能の神が与えるその罰の重さは、その罪に見合ったものであり決して重すぎることはない、はずである。それゆえ、地獄で罰せられている人に同情することは神の摂理への不信表明となる、はずである。実際、ダンテは作中のウェルギリウスに次のような台詞を言わせている。場所は地獄の第8圏、4番目の濠で未来を占った者が罰せられているところである。頭部が前後ろ逆になってしまって、背後しか見ることができなくなった罪人たちの姿に同情するダンテに対してウェルギリウスはこう言う...

「おまえまでまだそのような愚かしい真似をするのか？

ここでは情を殺すことが情を生かすことになる。

神の裁きにたいして憐憫の情を抱く者は

不逞の輩の最たるものだ。⁴³

つまり、罰せられる罪人へ同情するダンテを厳しく叱責する。第2圏での描かれ方との違いをどのように理解すればいいだろうか？

すぐに思いつくのは、ウェルギリウスの立場は変わらないが、第2圏ではダンテがすぐに気絶してウェルギリウスの叱責する間がなかったというものであろう。しかし、そういうタイミングで作中のダンテを気絶させたのは他ならぬ著者ダンテで

ある。

あるいは、第2圏ではまだダンテ自身が罪から浄化されてなかったからと言うべきであろうか？つまり『神曲』の地獄の道行きは、さまざまな罪を犯した人びとがどのように罰せられるか見てゆくことでダンテ自身が罪から目覚め自分を取り戻すためのものである。しかし第2圏はその過程が実質的には最初の圏である。まだダンテは自らの罪からまったく抜け出せていない、と解すべきだろうか？そしてそのような問いかけに対しては、おそらくそうだと答えるべきだろう。罪人への同情でも第2圏でなされるのと第8圏でなされるのとでは意味が異なる。しかし同時に指摘しておかねばならない。フランチェスカとパオロのエピソードは、まだ罪の中にある作中のダンテを描写するためだけならば、不必要なほど美しく魅力的に描かれている⁴⁴。われわれはそこに、本来は他の神など入る余地のないはずのキリスト教的大伽藍の中に、ある意味不思議な仕方で同居した愛神への信仰を見いだすことができるのである。

結語に代えて

冒頭で言及したように C.S.ルイスは恋愛の発明に関して「愛の宗教」という側面を指摘したが、以上のようにわれわれはトルバドゥールの流れを汲む中世末期の二人の詩人において「愛の宗教」という側面がどのように息づいているかを瞥見した。そこにおいて見られたのは、ある意味不可解な共存で、別の言い方をすれば、愛神の伝統というものがキリスト教文化の中で特別な位置を占めていて単に否定してすませることのできないものだったことの証左であった。

すなわちダンテとペトラルカが恋愛に対して見ているのは、それがたとえ婚外の、しかも肉体的側面を伴う恋愛であったとしても彼らがそこに見いだしているのはおそらく美であろう。ダンテがフランチェスカの話に卒倒したのは、その二人の愛のあまりの美しさゆえであったと理解するのは決して突飛な解釈ではない。ペトラルカが自ら分身「アウグスティヌス」による恋愛批判を公にしなかった理由の一つとして彼が恋愛に抗しがたい魅力を感じ続けていたと考えることは不自然な解釈ではない。愛に、そして愛し合う二人に、理屈を超えたような美を見出す、さらにはその美の根拠としての神的要素つまり神聖さや崇高さを見いだすというのは今日のわれわれにまで流れ届いている恋愛に対する見方、「恋愛の範型」である。そしてそ

れは同時に、古代文化の中の西洋には、あるいは近代化という名の西洋化が為される前の日本には存在しなかった価値観である。そのような恋愛の範型は、キリスト教文化のなかでキリスト教的価値観と癒着でもまったくの排除でもない奇妙な緊張関係の中、形作られてきたことに気づけば、今日の西洋化された文化の中で恋愛というものに過大ともいえる価値が置かれている背景も理解できよう。そしてそのような緊張関係がまさに始まったときの証言として、ダンテとペトラルカの記事を読むことができるのである。

謝辞

本研究は科研費(21520039)の助成を受けたものである。ここに記して謝意を表す。

註（引用・参考文献）

¹ 「正しい」という判断については別稿にて論じているので、ここでは繰り返さない。下記を参照いただきたい。拙論「恋愛感情と感情表現と恋愛の範型 —恋愛12世紀発明説の再検討—」、『自然と文化』（福岡歯科大学・福岡医療短期大学紀要）、2009年11月、第36号、25-37頁。「悲劇を生む狂気と神聖な感情 恋愛が「発明」される前の恋愛の形」、『自然と文化』（福岡歯科大学・福岡医療短期大学紀要）、2010年12月、第37号、17-40頁。

² 上述拙論「恋愛感情と感情表現と恋愛の範型 —恋愛12世紀発明説の再検討—」参照。

³ C. S. ルーイス『愛とアレゴリー —ヨーロッパ中世文学の伝統』玉泉八州男・訳、筑摩書房、1972年11月；C. S. Lewis, *The Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition*, Oxford University Press, 1936.

⁴ 代表的なものとしてピーター・ドロンの研究が指摘できる。ピーター・ドロンの『中世ラテンとヨーロッパ恋愛抒情詩の起源』瀬谷幸男・和治元義博・訳、論創社、2012年7月；Peter Dronke, *Mediaeval Latin and the Rise of the European Love-lyric*, Oxford University Press, 1969. ピーター・ドロンの『中世ヨーロッパの歌』高田康成・訳、水声社、2004年6月；Peter Dronke, *The Medieval Lyric*, 1996.

⁵ 拙論参照、「愛の発明と個の誕生 — 思想史的な観点から —」、『比較思想史論輯』（比較思想史学会福岡支部）、2004年3月、第6号、34-43頁。

⁶ 『愛とアレゴリー』4頁；*Allegory of Love* p. 3.

⁷ アンドレーアス・カペルラーヌス『宮廷風恋愛について—ヨーロッパ中世の恋愛術指南の書』瀬谷幸男 訳、南雲堂、1993年11月；*Andreas Capellanus on Love*, ed. P. G. Walsh, Duckworth Pub., 1983/07.

⁸ この人物についてはほとんど詳細が分かっていない。しかし「アンドレアス・カペラヌス Andreas Capellanus」が意味するところは「礼拝堂付司祭のアンドレア

ス」であるので、司祭ではあったであろうと目されている。

⁹ 「ヨハネの手紙一」4章8節、16節。

¹⁰ A. ニーグレン『アガペーとエロース』岸千年・大内弘助・訳、新教出版社、1954年1月(1995年2月、復刊)；Anders Nygren, *Den Kristna Kärlekstanken genom Tiderna : eros och Agape, 1930-1936; Agape and eros : a study of the Christian idea of love, Society for Promoting Christian Knowledge, 1932-1939.*

¹¹ この点に関しては上記拙論「愛の発明と個の誕生 —— 思想史的な観点から ——」を参照。

¹² C.S.ルイス『四つの愛』蛭沼寿雄 訳、新教出版社、1994年8月；C S Lewis, *The Four Loves*, Geoffrey Bles, 1960.

¹³ 『四つの愛』152頁：

何年か前に私が中世の恋愛詩について書き、その奇妙な、半ば偽りの「愛の宗教」を述べた時に、私はこれを純粹に文学的といってよい現象として取り扱ったほど盲目であった。

¹⁴ 『中世思想原典集成 13 盛期スコラ学』上智大学中世思想研究所 編、平凡社、1993年2月、650, 674頁。

¹⁵ ペトラルカ『わが秘密』近藤恒一・訳、岩波書店、1996年3月18日；

Francesco Petrarca, *Secretum (De Secreto Conflictu Curarum Mearum)*

<http://www.classicalitaliani.it/petrarca/prosa/petrarca_secretum.htm>.

¹⁶ フランチェスコ・ペトラルカ『カンツォニエーレ—俗事詩片』池田廉・訳、名古屋大学出版会、1992年8月； Francesco Petrarca, *Canzoniere*, ed. M. Santagata, Mondadori, 2004.

¹⁷ 『カンツォニエーレ』訳者解説(674-79頁)参照。

¹⁸ 『わが秘密』193頁。

¹⁹ 『わが秘密』訳者解説(313-46頁)参照。

²⁰ 『わが秘密』159-60頁。以下、本書の引用は近藤訳を用いる。

²¹ 1343年(あるいは1347年)に成立したと推測されている。前掲書同箇所参照。

²² 『わが秘密』162頁。

²³ 『わが秘密』189-90頁。

²⁴ 『わが秘密』196頁。

²⁵ 『わが秘密』訳者解説(314頁)参照。

²⁶ 『神曲』には複数の日本語訳が存在するが、本稿では次の邦訳から引用を行う；ダンテ『神曲』平川祐弘・訳、河出書房新社、1992年3月。『神曲』の原文に関して複数のサイトで公開が為されているが、次のサイトが英訳とならべて参照でき、便利である；“The Princeton Dante Project”, <<http://etcweb.princeton.edu/dante/>>

²⁷ 参照、村松真理子「「天使のような貴婦人」の系譜 —シチリア派、清新体派からベアトリーチェの誕生まで—」西洋中世学会『西洋中世研究』4号、2012年、98-124頁。

²⁸ ベルナールは愛を4段階にわけ、最下の肉的自己愛から最上の神のための自己愛へと秩序づけられるのだと論じている。参照『神を愛することについて』；『キリスト教神秘主義著作集 2 ベルナール』金子晴勇・訳、教文館、2005年12月。

²⁹ 『牧歌』第10歌、69行：“*Omnia vincit Amor et nos cedamus Amori*”；ウエルギリウス『牧歌/農耕詩』小川正広・訳、京都大学学術出版会、2004年5月。

³⁰ ベアトリーチェの訃報に接し悲しみに暮れたダンテがキケローの『友愛について』やボエティウスの『哲学の慰め』を読みふけたという逸話は有名である。なお、キリスト教神学論文も書いているボエティウスは天国に配されている（天国篇、第10歌123-29行）。

³¹ 『神曲』地獄篇、第5歌、25-39行。

³² 参照、清水孝純『西洋文学への招待 一中世の幻想と笑い』九州大学出版会、1982年7月、182-3頁。

³³ 『神曲』地獄篇、第5歌、73-74行。

³⁴ 『神曲』地獄篇、第5歌、77-78行：“*e tu allor li priega / per quello amor che i mena, ed ei verranno*”。

³⁵ 『神曲』地獄篇、第5歌、100-07行。

³⁶ 『神曲』の記述では二人が殺害されたことがほのめかされるだけであるが（同所106-07行）、ジャンチオットの容姿が優れず縁談の際には美貌の弟パオロを代役にたてたこと、ジャンチオットは性格が凶暴で逢い引きする二人を取り押さえ惨殺してしまったことなどは、ダンテが『神曲』を書いた当時有名な話だったようである。参照、『西洋文学への招待』185-7頁。

³⁷ 『神曲』地獄篇、第5歌、108-14行。

³⁸ 『神曲』地獄篇、第5歌、121-22行。

³⁹ 肉欲の罪を犯した人びととしてダンテが並べた者の中に（トリスタンは出てきても）この二人の名前は出てきていない。『神曲』地獄篇、第5歌、52-69行。

⁴⁰ 『神曲』地獄篇、第5歌、127-38行。

⁴¹ また、トルバドゥールなど恋愛を歌った詩人たちをダンテは地獄ではなく煉獄にしている。『神曲』煉獄篇、第26歌。

⁴² 『神曲』地獄篇、第5歌、139-42行。

⁴³ 『神曲』地獄篇、第20歌、27-30行。

⁴⁴ 金子晴勇氏は同じ箇所をとりあげ「ダンテは宮廷風恋愛よりもいっそう高貴な精神的な愛を目ざしていた」と主張している。確かに『神曲』全体の構成の中でダンテが目ざしているのは「高貴な精神的愛」であるということは妥当であろうが、しかし人間的恋愛に対するダンテの否定しがたい同情が隠されることなく『神曲』において表現されていることを金子氏は見落としていると言わざるを得ない。参照、金子晴勇『愛の思想史 一愛の類型と秩序の思想史』知泉書館、2003年4月、66-70頁。